

先達の方々

犠牲者の供養(鎖塚)

前回、「中央道路の開削に当たった方々」で記しましたが、中央道路の開削にあたられた四人の方々は、北見地方の開拓に大きな役割を担った先達であり、かつ功労者であります。この方々のご苦勞をしのび、その霊を慰め供養している、その一つが、端野町緋牛内にある「鎖塚」です。

緋牛内の菊池坂の中腹に三つの「土まじゅう」がありますが、これは中央道路の開削に当たり亡くなった方々を埋葬した墓で、これを鎖塚と呼んでいます。

北見地方の開拓の先駆者である屯田兵の長男として端野町一区で生まれた中澤廣氏(元端野町長)が、端野町開基七〇年を迎えた昭和四一(一九六六)年に「開拓夜話」を著し、その一話(抜粋)として、

「私等はよく殿様バッタの大きなのを捕ったり、キリギリスをとらえたりして遊んだ

ものだが、国道を掘割ったような所に行くとき、赤土の上に真赤に錆びた鎖が投げたもので、それは四人をつないでいたもので、網走から旭川までの道路をつけた明治二四年頃、四人が働いているうちに死んでそのまま道路ぶち埋められた時のものだと言われた。夜になると火魂が飛ぶというので、随分怖かった。……。道路ぶちの赤土の現れているところに、よく赤錆の鎖が落ちていて、奇妙にそこは草も生えずに目についた。雨水で土が流れて鎖が出て来たのかと思う。私達はそこを「鎖塚」と呼んだ。旭川まで延々二百軒の国道筋には、この鎖塚が相当あるのではないだろうか。いまはもう、そんなことさえ忘れていくけれど、北見開拓の大動脈になった国道は、こうした犠牲で出来上り、その魂によって守られているのだ。道祖神とはどんな神様か私は知らないが、これらの人びとこそ道祖神といってよいのではないだろうか。」

と記し、四人労働の苦しみをしのび、勞をたたえ、霊への慰めを表しています。

中澤氏は、昭和四三(一九六八)年、鎖塚の由来を記した立札を建て、同四三(一九七三)年七月、地藏尊を祭り、その供養をしました。

また、この年、道立北見工業高等学校の小池喜孝教諭が、過酷な四人労働の実態を掘り起こした「鎖塚」(徳間書店)を発売しました。

さらに、昭和五一(一九七六)年、緋

牛内地区の方々が、地域開発の最初の犠牲者として慰霊するため、慰霊事業協賛会を設立し、六つの地藏尊と観音像を建立し、これに合わせ町は供養碑を建立しました。

以来、毎年八月一五日に慰霊祭を行い、鎖塚の保存に努めています。

これらにより、鎖塚の存在とその意義が理解され、高等学校の修学旅行に組み入れられ、また、観光旅行でこの地に立ち寄り礼拝し、霊を慰める人たちが増えてきました。

なお、中央道路の開削の伴う犠牲者の慰霊については、端野町の外、沿線の網走市、北見市、留辺蘂町、白滝などの市町村で慰霊碑などを建立し、慰霊、供養をしています。

田中 誠



(裏面に続きます)

注※1
 ◇北見市指定文化財
 「鎖塚の区域」

明治二四年（一八九一）、網走・上川間に中央道路が開削された。この工事には約一五〇〇人もの釧路集治監の囚人が使役されたが、四月から一二月という短期間に約一六三kmもの距離を開削するという突貫的な難工事のため二〇〇人以上の囚人が倒れて亡くなった。この鎖塚の土饅頭はそのとき亡くなった囚人の墓標のひとつとされている。ただし地形の変化等があり、その形状については現在よりもかなり低かったと考えられる。端野町の開拓は明治三〇年（一八九七）の屯田兵の入り地により、本格的に始まったが、その入地に至る道路はこの工事によって作られた。

平成四年二月二七日指定



鎖塚供養碑（右側）と
土饅頭（左側）

鎖塚供養碑の場所

